

令和7年度 第3回浦安市いじめ対策調査委員会 会議録

1 開催日時

令和8年2月9日(月) 午後6時00分～

2 開催場所

浦安市役所4階会議室S2・S3

3 出席者

(委員)

川義郎委員長、高橋教委員、村田清光委員、太田恵子委員

(教育委員会職員)

船橋紀美江教育長、秋本豊教育総務部部長、村上陽子教育総務部次長兼教育政策課課長、
鈴木章仁教育総務課課長、鳥海勉学務課課長、峯崎泰利保健体育安全課課長、
宮崎智次郎指導課課長、青山陽子教育センター所長

(事務局)

小黑拓主幹、塚本望副主査、鎌田まゆ佳副主査、後藤拓真主任主事、植田一史主任主事

4 傍聴者

2名

5 議題

(1) 報告

①第2回いじめ対策調査委員会会議録(案)について

②浦安市いじめ防止基本方針の取組における「点検評価」について

(2) 協議

①浦安市いじめ対策プログラムについて

②事例検討(非公開) ※事例なし

6 議事の概要

(1) ①第2回いじめ対策調査委員会会議録(案)について

第2回いじめ対策調査委員会会議録(案)について事務局から説明した。

②令和7年度浦安市いじめ防止基本方針の取組における「点検評価」について

令和7年度浦安市いじめ防止基本方針の取組における「点検評価」について、事務局から説明し、協議した。

(2) ①浦安市いじめ対策プログラムについて

浦安市いじめ対策プログラムについて事務局から説明し、協議した。

②事例検討なし

(3) 諸連絡

7 会議経過

議題(1)① 第2回いじめ対策調査委員会会議録(案)について、事務局から説明した。

【委員長】 報告事項①について、委員の先生方、お気づきの点等はあるか。

(特に意見なし)

【委員長】 では、報告事項①については確定とさせていただく。

続いて、報告事項②浦安市いじめ防止基本方針の取組における「点検評価」につ

いて、事務局から報告をお願いします。

議題(1)② 令和7年度浦安市いじめ防止基本方針の取組における「点検評価」について、事務局から報告した。

【委員長】キッズビューとは何か。

【事務局】登校管理システムという保護者がスマートフォンにアプリを入れて保護者と学校とで連絡ができるツールである。保護者からの欠席連絡や、学校に伝えたいことを連絡ができるものである。学校からは保護者への連絡、便り、手紙やアンケートなどをデータで配付したりしている。市からも一斉に情報を伝える1つのツールにもなっている。

【委員長】活用度はほぼ100%なのか。保護者が何か連絡があれば、このアプリを使って連絡できるか。例えばいじめについて、自分の子供ないし他の子供がいじめにあっているという連絡は、このアプリでできるのか。

【事務局】電話だけではなくてこのキッズビューを通じていじめの被害を訴える保護者もいるため、そのような活用もされている。

【委員長】いじめメール相談が増えないこともあり、キッズビューを100%で導入しているのであれば、これを使って保護者の方からのいじめ連絡を拾いやすい状況にできないのか。児童生徒の一人一台タブレットには、キッズビューと同様に児童生徒が学校と連絡が取れるアプリなどはあるのか。東京都中央区では、明日の時間割や持ち物の連絡など、タブレットを見ないとわからない。そのように、一人一台持っている端末などでいじめの行為や嫌だと感じたことを、投稿できるようなシステムというのは難しいものなのか。

【事務局】先ほどのキッズビューは基本的には保護者対象のものである。子供の場合は一人一台端末の中にメール相談などをリンクで貼っており、そこからアクセスできるようになっている。ただ、専用のアプリという形ではないのでキッズビューのようなものの方が便利ではある。

【委員長】個人的にはチャットボットのような、「今日嫌なことがあったんだよ」、「どんなこと？」とAIが答えてくれて、それを情報として拾ってくれるようなやりとりができてよいのではと考える。

議題(2)①令和7年度浦安市いじめ対策プログラムについて、事務局から説明した。

【事務局】一番上にある「いじめ防止プログラム」を、「いじめ対策プログラム」に変更。「いじめ対策プログラム」は仮称ではなく、「いじめ対策プログラム」でいきたい。（仮称）を外していただきたい。

【委員長】これは、全てのリンクを確認しているか。所々これでいいのか、というところがある。いじめの重大化を防ぐための研修事例など非常に細かいため、これをスマホで読んでいくのはどうなのか。どういうものが一番望ましいのか。点検評価についても、いじめ対策プログラムについても、情報量が非常に多い印象である。より見やすく、伝えたいことが伝わる資料だと良いのでは。

【委員】実際にこういう形で配るといったイメージなのか。

【事務局】紙ベースと、データでいつでも見られるようにと考えている。

【委員】対策プログラムを活用しようとする際、その趣旨がぶれてしまう懸念がある。

プログラム作成に至ったねらいや思いを冒頭に明示するとよい。QRコードから詳細情報を得るつくりになっているが、普段コンピューターを使用している教員にとっては、URLをリンクで貼るとよいのではないか。学校と保護者とのやりとりでは、キッズビューが使われている。相談しやすい窓口機能の一つとして、キッズビューにこのような相談窓口があると、いじめ対策の取組の周知にもつながると感じる。

【委員長】キッズビューで、それが可能か確認してみるのもよいのでは。

【委員】メッセージ、思いをどうするかということは大事なことだと感じた。この「いじめ対策プログラム」は最終的には子供たちのためである。そうなるためにサポートを受ける対象は、いじめ加害者被害者だけでなく教員も含めたクラス全体だと考える。いじめ対策の取り組み自体は学校全体のためのものであるだろう。しかし、これを全て読んで理解するのは相当大変であり、負担に感じることもあり得るため思いが明示されていた方が読みやすいであろう。もう1つの視点として、いじめとは、教員が個人で背負うものではないということである。医療現場の立場からすると、医療の現場で起きたトラブルは、個人で解決・対策するのではなく、みんなで解決する意識を常にもって対応している。例えば、今までそういうことを隠していた人が報告しやすくなる。それが目指すべき体制であり、今回の結論の1つだと考える。学校においても、みんなでやっていくものだという意識が絶対的に必要である。

【委員】パンフレットを見た時、とてもよく作られていると感じた。令和8年度にそのまま継続となる重点「自他を大切に作る安心安全」は、非常に大きなテーマである。いじめについて児童生徒が相談しない理由、またはその人にどうして相談したかは大事な視点だと考える。子供たちは、相談すると物事が動いてしまい、親切に大人が行動を起こしてしまうことが心配で不安なようである。何か問題が起きた時に、教員に相談すると話し合いになってしまう。家庭内でも同様で、家で話すと保護者が学校に来たり、相手の家に行ってしまったたり、それが困るということである。対応として名前を出さない、大きな話にしないなど考慮できるとよい。それでもいじめが起きた時には、一人で抱えず誰か信頼できる大人に相談してほしい。保護者には子供の話はその時に聞いてほしいとお伝えすることが多い。子供の話を鵜呑みにしてしまう保護者もいるが、子供の話をきちんと聞いた上で「相手から見てどうだったのか」という視点で捉えることが必要である。またいじめの解消の定義として、いじめが解消されたかと、再発防止についても大事な視点になると考える。

【委員長】子どもにとって「信頼できるような大人」が、いるのかいないのか。例えば、先生や親に話してもだめ。動いてしまうのも嫌だけど、動かない親も困るということ。その中でそういう児童生徒に対して信頼できる大人はどこにいるのだろうか。

【委員】小学校高学年あたりから特に中学生は、オンラインゲームのゲーム仲間に相談する子が多い。ワードを入れて、そこにヒットしたサイトの中で相談をする。最近では小学生にはいないが、高校くらいになるとAIに相談している。

【委員】いじめの対策の意識が、年齢によって全然違うというのも頭に入れておかなければ

ればいけない。幼稚園や1年生だと誰か信頼できる大人に伝える、その1点だと考える。ある程度の年齢だといじめの問題はみんなで取り組み、みんなで考えるようになっていくであろう。最初は信頼できる大人との偶然の出会いが必要ではあるが、親、先生、先輩など、高学年、中学生と学年が上がっていくと、だんだんと意識が高い子供がいじめを教えてくれるようになる。そういうのが目指すエンドポイントではないか。

- 【委員長】 AIに相談したくなる気持ちは、よく考えると理解できる。その点は積極的にAIに相談をするのか、AIに聞くのではなく私たち大人に相談するのか、どちらがよいと思われるか。
- 【委員】 AIにもスマホにも、リテラシーが必要である。参考にする程度ならいいが、引きずられてしまったり情報の取捨選択が曖昧になってしまったりすると、かえって傷ついたりする。
- 【委員】 AIは思考を固めないということには、有効なのではないか。苦しくなった人間は、事態が変わらない、耐えるしかないと非常に大きな悩みになってしまうが、AIは比較的明確な提案をしながら、思考を固定化させない。ただし、責任を持った一言は、期待できない。そこは実際近くに相談できる出会いがあるといい。AIは入り口としてはよい。当院で作っているSNSや動画、ゲーム中毒に対するプログラムも最終的にどうかというよりは、保護者が相談して事態を動かす新たな一手が生み出されればいいのでは、と考える。
- 【委員長】 試しにChatGPTに「今日、学校で嫌なことがあったんだ」と聞いてみた。「それは辛かったね。ここに来てくれてありがとう。よかったらどんなことがあったか教えてもいいよ？無理にうまく話さなくても大丈夫だし、途中でやめてもいいからね。今日はもう頑張ったから、少し肩の力を抜こう、私は味方だよ」と返ってきた。
- 【委員】 やはりAIは話を広げていっている。それによって、次の一言を言いやすくなる。それで事態が解決していくことも多いのでは。だが最終的な完成品というところまではまだ難しいであろう。
- 【委員長】 AIとの付き合い方というのは、今指導課ではどこまで進んでいるのか。悩みをAIに相談することについて、勧めているのかそれとも、勧めないのか。
- 【事務局】 AIの活用については、考えている段階である。AIは、必ずしも正解、正しいわけではないということは伝えなければならない、その中でどのように活用していくか。現状は、まだ子供が活用する際には制限をかけている。
- 【委員長】 誰にも知られないで済む、またその物事が大きくならないというメリットがあるため、とりあえず聞いてみよう、となる。またAIにはまっている人もいる。小中学生の活用について、これから研究が進むであろう。また進めていく必要があるのではないか。まずは、想像を超えていくものなのか、教育で何とかしていくことなのかを指導課で検討する必要があるのではないか。
- 【教育長】 AIの回答を聞いてすごいと思ったが、私の個人的な考えでは、私たち教育者がいじめの相談においてAIを勧めるかということ、それは勧められないのではないか。AIを決して否定するわけではない。しかし、誰にも相談できていない子供たちをどう救っていくかを考えるのが教育人の立場であると考えている。年

年齢が上がるにつれて、いじめというのはみんなで解決していくものであるという意識は、やはりすごく大切であると考えます。

【委員】仮にAIに相談する人がいる場合、その背景には孤独がある。ただ、この孤独には、否定的な意味合いはない。大人になればなるほど孤独な中、乗り越えていかななくてはいけないものが必ずある。その場合、AIを使ってもよいと考える。大人ならばそういうシチュエーションも多いであろう。ただ小学校1年生がAIしか相談できないとなると、孤独でやっていくには早いのではないかと。

【委員長】AIは道具である。使って上手くいけばプラスとなり、上手くいかなければマイナスである。子どもが使う意味合いを考え、マイナスになる部分を教育の力で解決する。教育とAIが、相互補完のような形であればよいのでは。いじめの対策で失敗する教員や間違えた考えを持った教員に対して、どのように理解させるか。とても良い「いじめ対策プログラム」だが、本当に届けたい教員にどのように届けていくか。その方法について考える必要があるのではないかと。また自身の指導に自信を持ち過ぎている教員も同様である。

【委員】この後の効果的な活用方法にも関わることだが、このプログラムはある面ではマニュアルである。そのマニュアルを、教員がどれだけ使えるかは学校が組織として取り組むことができるかどうかにかかっている。資料の6の年間の取り組みを大きく提示し、学校がこれを例としてどれだけ教育課程に落とし込めるかが大事である。学校の組織体としてどれだけ活用していくプランができてるか、各学校がしっかりと位置付けることで組織体として強くなっていくのではないかと。生徒指導主任に伝えるだけでなく、主に教務主任が中心となって作成する教育課程においても、この視点を入れて、プランを作り広げた方がより定着していくのではないかと考える。

【委員】共通理解の土台というものが絶対必要で、共通理解のための教科書となるであろう。

【委員長】委員の方から充実したご意見をいただきました。指導課でまとめていただきたい。本日の議事はすべて終了した。

事務局から連絡事項を伝え、閉会。

問い合わせ先 教育総務部指導課 担当 後藤 拓真

電話 047-351-1111（内線）19216